

だ い ず 通 信

令和7年 第1号

栽植本数を確保するため、適切なは種量にしましょう。
生育初期の病害虫の被害を抑えるため、種子消毒は必ず実施しましょう。
除草剤は、は種後速やかに土壌処理除草剤を散布しましょう。

1 ほ場準備

- ・転作田で水が溜まるほ場は、額縁明きょやサブソイラを施工し、排水対策を行う。
- ・耕起、碎土は大豆の出芽・苗立ちに影響するため丁寧に行う。
- ・完熟堆肥等の有機物を施用し、地力向上を図る。
- ・作付前に土壌診断を行い、pH5.5～6.5 を目標に苦土石灰等を施用する。
- ・施肥は、おおすずやシュウリュウの中生品種では基肥窒素成分で10a 当たり2～3kg を基準とするが、ほ場の地力によって増減させる。

表-1 基準施肥量（成分量：kg/10a）

品種名	窒素	りん酸	加里
中生品種 （おおすず、シュウリュウ）	2～3	10～15	8～10

2 は種作業

- ・栽植本数を確保するため、は種量は慣行栽培で **7～8kg/10a** を基準とし、品種やは種時期により調整する。
- ・前作が野菜等で地力が高く、倒伏のおそれがある場合は、施肥量を減じるとともに、は種量を減らすか、は種日を遅らせる。
- ・大豆の生育初期に被害を及ぼす病害虫の多くは種子消毒で防ぐことができるため、必ず実施する。

表-2 は種時期及びは種量

品種	は種時期	条間 (cm)	は種量 (kg/10a)	栽植本数 (本/10a)
おおすず	5月中～下旬	60～80	7～8	20,000
	5月下旬～6月上旬	60～80	8～10	20,000～ 25,000
シュウリュウ	5月下旬～6月上旬	70	5～6	15,000

表-3 種子消毒で可以使用できる薬剤

薬剤名	適用病害虫	使用方法	使用回数
クルーザーMAXX	紫斑病、茎疫病、黒根腐病、アブラムシ類、ネキリムシ類、ハト・キジバトによる種子食害忌避	乾燥種子1kg 当たり原液8ml 塗抹	1回
キヒゲン R-2 フロアブル	紫斑病、タネバエ、ハト・カラスによる種子食害忌避	乾燥種子1kg 当たり原液20ml 塗抹	1回

3 除草作業

- ・除草作業は、大豆や雑草の生育に合った作業内容を選択し、効果的な時期を見極めて行う。

表-4 除草作業の時期とポイント

大豆の生育状況	作業時期	作業内容
大豆は種前	は種前	【非選択性除草剤の散布】 ・スギナやツユクサ等除草剤が効きにくい雑草が多い場合に行う。散布前は耕起せず、できるだけ雑草を出芽させる。 ※散布時期は剤により異なるので注意する。 【耕 起】 ・雑草は確実に土中に埋め込む。
大豆は種直後～発芽前まで	は種直後～3日	【土壌処理除草剤の散布】 ・土壌処理除草剤は発芽前または発芽直後の雑草に効果が高い薬剤のため、は種後速やかに散布する。
本葉1～3葉期	は種後10～30日	【茎葉処理除草剤の散布】 ・雑草の発生が多いほ場や、中耕・培土作業が十分行えない場合に行う。 ・大豆5葉期以降は株元の雑草に薬液がかかりにくくなるため、早めに散布する。
3葉期～6葉期	は種後30～45日	【中耕・培土の実施】 ・1回目は大豆2～3葉期(は種後30日頃)初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。 ・2回目は5～6葉期(1回目の2週間後)第1本葉のつけ根まで土寄せする。 ・雑草が大きくなるとすき込みきれずに再生するため、注意する。 ・作業は開花前までに完了する。

STOP！農作業事故 - 農作業事故を防ぐ3つのポイント-

- 作業環境に危険な箇所がないか確認し、改善・整備を行いましょう！
- シートベルトの着用など、農業機械の転落・転倒対策を徹底しましよう！
- 家族や周りの人など、地域全体で声をかけ合いましょう！